



庭のさんしゅうの木
鳴る鈴かけて ヨーホイ
鈴の鳴るときや
出ておじやれヨ

冒頭で紹介したのは「ひえつき節」です。この「さんしゅう」とは、「サンショウ（山椒）」なのか「サンシュユ」なのか、確かに、興味ある話です。しかし、発祥の地宮崎県椎葉村の住民の話（村役場のHPによる）では、「山椒」を「さんしょう」と歌うべきところを「さんしゅう」と訛っただけだとのこと。どうも、サンシュユに願をかけるという伝承にあやかっただけというのがオチのようです。聞けば、この地にはサンシュユの木は全く生えていないとのこと、それだけ暖かい気候だという証拠です。

いきなりずっこける話題から始まって恐縮ですが、管理事務所の玄関、向かって右側に、このサンシュユが葉の出る前に黄色い花を咲かせています。黄金色をしているので、牧野富太郎は「ハルコガネバナ」という名をつけましたが、その気持ちも分かる気がします。また、秋に赤く熟した果実から「秋珊瑚」の別名も持っています。

開花時期は梅の香りに誘われる頃に重なり、春の到来をいち早く知らせる植物の1つです。もともと中国や朝鮮に分布するミズキ科の落葉高木で、日本へは享保年間に薬用植物として導入されたとされています。「さんしゅう」とは中国名「山茱萸」の音読みによります。「茱萸」はグミのことで、秋にはグミに似た赤い実がなります。

この果実が薬用になります。真っ赤に熟した果実から種子を抜き、乾燥させたものを中国では山茱萸（さんしゅう）と称していたわけです。煎じたものを強壯薬や腰痛、めまいなどの薬として用いるほか、酒に浸して薬酒をつくります。

冬芽には葉芽と花芽があって、それぞれ違う形をしています。色はどちらも褐色を帯び、花芽は先がちょっととがった球形で、葉芽は長さ3～4ミリくらいの細長いもので、先がとがっています。興味のある方は、意識して観察すると楽しいものです。

葉はちょっと分厚めで、裏から見ると毛が目立ち、秋の紅葉はなかなか渋くて個性的です。